

白井市の景観・みどりの特性

1. 白井市の景観・みどりの特性を把握するための視点

白井市は北総台地と川沿いの低地で構成され、台地の縁は「谷津」と呼ばれる小さな谷が多数存在し、これらの地形的特徴が現在の景観・みどりの基盤となっている。また、台地上に形成された古代のムラや近世の宿場・牧など、地形的な特徴は古来人々の生活に密接に関わり、それが歴史・文化を形成してきた。植生は地形的な特徴に対応するように分布しており、その地形的特徴や植生から白井市の生態系は形成されている。また、地形や植生を活かすように土地利用が進み、人々の生活が形成されてきた。

以上の観点から、白井市の景観・みどりを把握するための視点として「地形」「歴史・文化」「植生・生態系」「土地利用」の4つのキーワードがあり、それらがレイヤーとなって重なり、現在の白井市の景観・みどりが形成されていると捉える。

地形	・北総台地と川沿いの低地、谷津等の特徴を有する ・古来白井の人々の生活・活動や歴史・文化等の基盤となっている
歴史・文化	・景観・みどりの形成の履歴 ・現在の白井の人々の生活・活動に密接に結びつく
植生・生態系	・地形や歴史・文化が基盤となり形成されてきた自然の営み ・動植物の生活・活動が表出する
土地利用	・地形や歴史・文化が基盤となり形成されてきた人間の営み ・人々の生活・活動が表出する

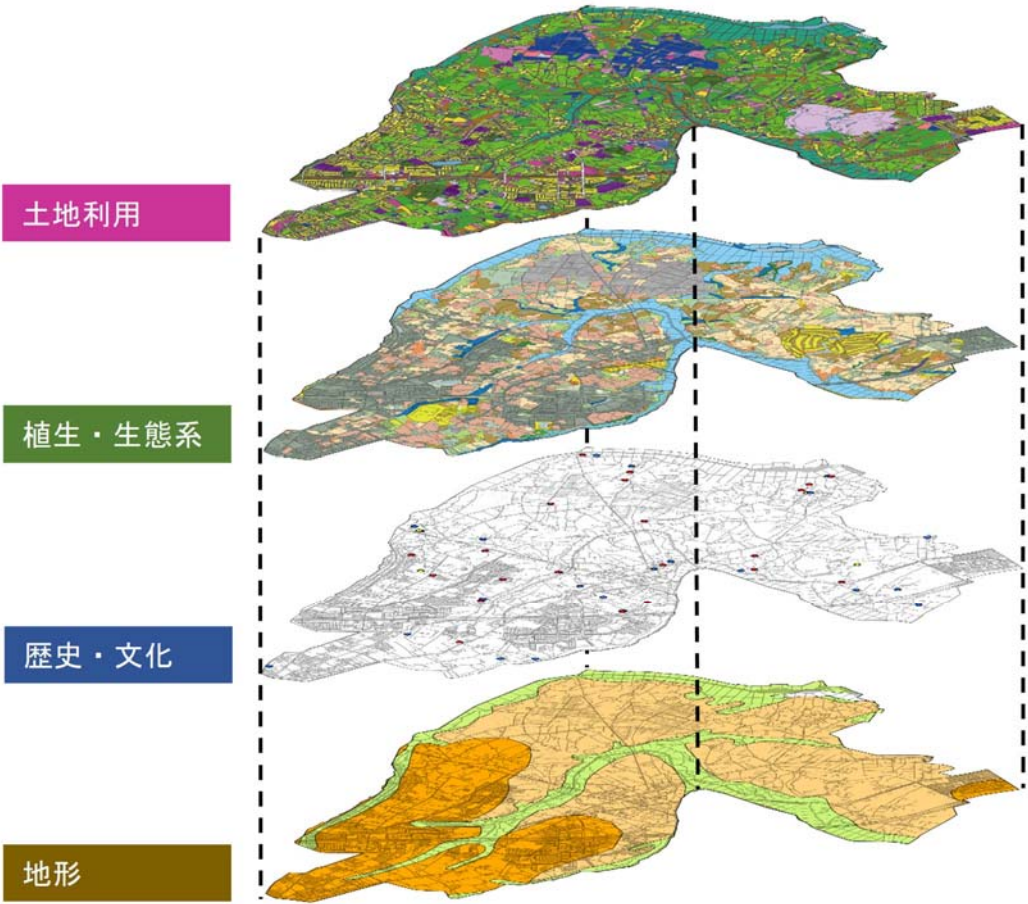


図1 白井市の景観・みどりを把握するための視点

1.1 地形

(1) 地形の成り立ち

白井市の大部分は約 12 万年前に海底が隆起して形成された標高 20 メートルから 30 メートルの平坦な台地と、標高 5 メートルから 20 メートルの低地で構成されている。

台地の縁には「谷津」と呼ばれる小さな谷が多数存在しており、台地に降った雨は地下にしみ込み地下水になる。地下水は大地と谷津が接する斜面下（谷津の縁）で湧水として地上に現れ、この湧水が集まって河川が形成され、さらにその河川が集まって、北側は下手賀沼に注ぐ金山落、南側には印旛沼へ流れ込む神崎川や二重川が形成されている。

白井市は、このように長い時間をかけて形作られた台地と低地、その間の斜面（河岸段丘）に生育する樹林による自然的な景観と集落、湧水を活かした谷津の水田（谷津田）、河川沿岸の低地に広がる水田、関東ローム層による肥沃な台地に展開された農地などが基本的な構成となっている。

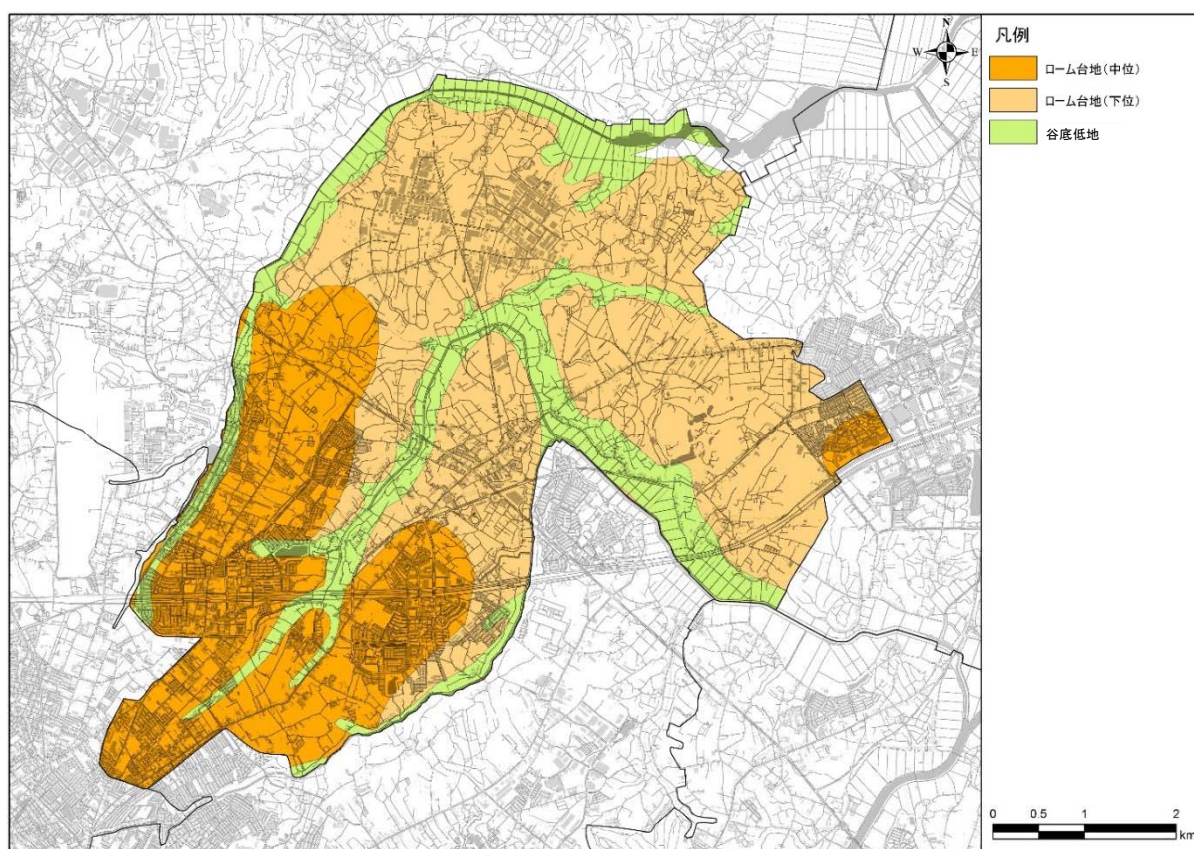


図2 地形分類図

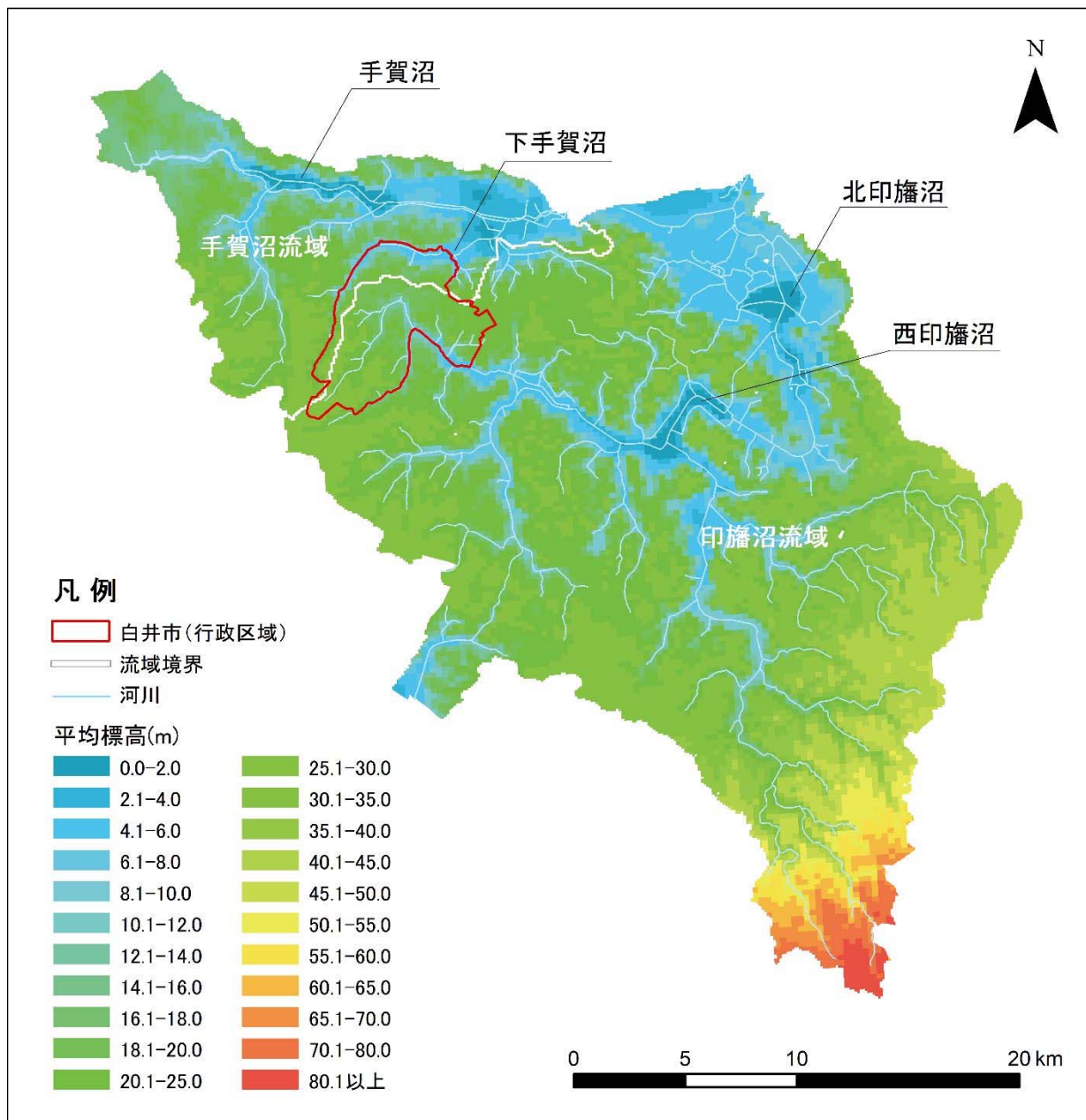


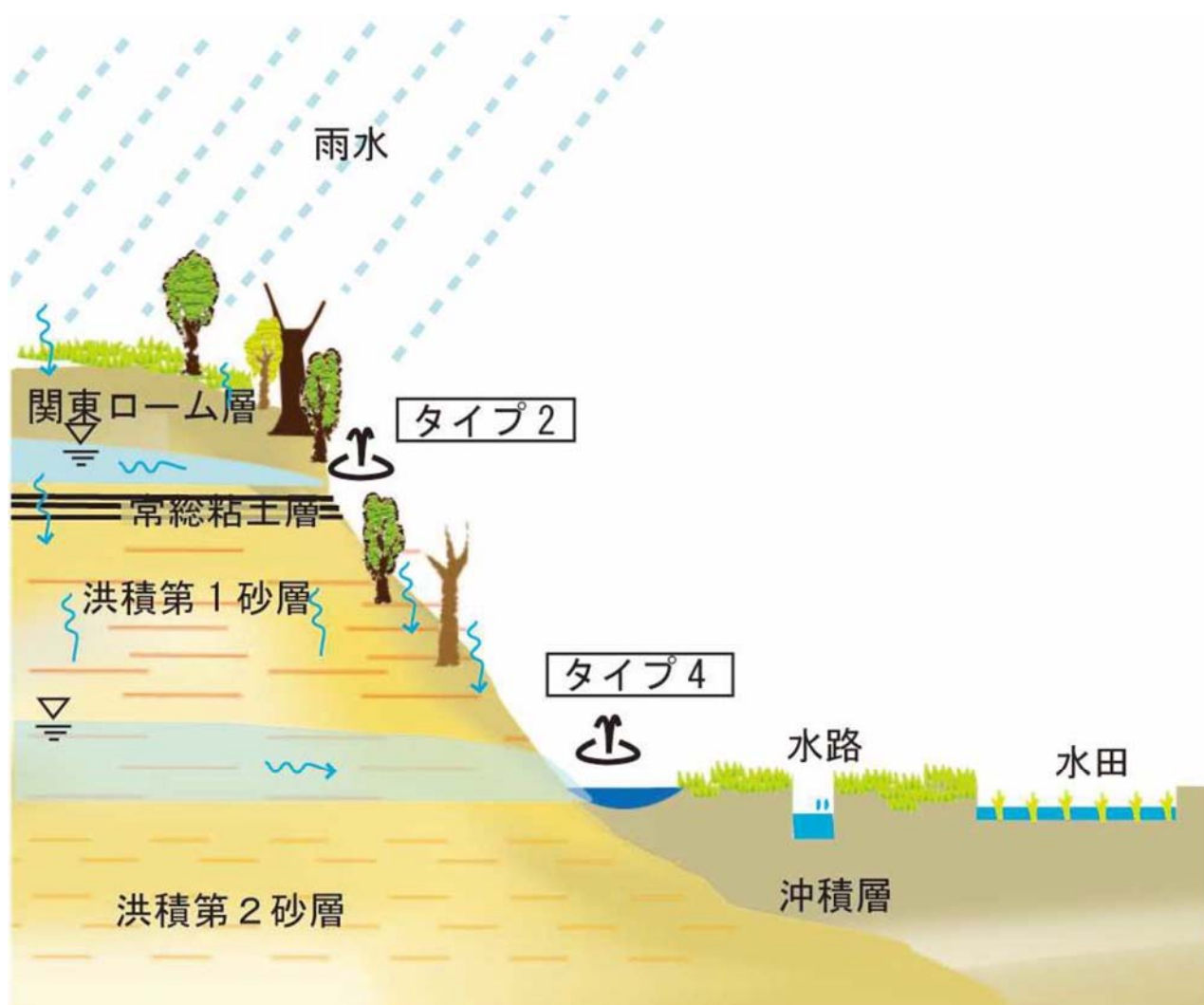
図3 白井市が属する流域と地形

(出典：国土数値情報ダウンロードサイト「流域メッシュ」、「河川(ライン)(ポイント)」、「標高・傾斜度5次メッシュ」、「行政区域(ポリゴン)」(国土交通省)(<https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/index.html>)を加工して作成)

(2) 手賀沼流域の概要

手賀沼は、千葉県の北西部にあり、干拓事業により現在は手賀沼と下手賀沼に分かれた形となっている。下手賀沼流域では、金山落などの河川が下手賀沼に注ぎ、下手賀沼から下手賀川を経て、亀成川、手賀川と合流した後、最終的に利根川に流入する。

手賀沼は縄文海進時（約 1 万年前頃）に形成された海跡湖で、周辺は台地に囲まれている。手賀沼流域は、粘土質の高い関東ローム層や粘土層及び砂層で構成された台地と、これが浸食された谷津と呼ばれる谷底低地、および谷津に面した斜面や崖といった地形要素から構成されている。谷津からは、台地に涵養された地下水が湧水として湧出し、流域の生態系や人々の暮らしの基本的な要素となっている。



タイプ 2：湧水は、常総粘土層の上面の主に台地斜面上から湧出する。

タイプ 4：洪積第一砂層中より湧出するタイプで、洪積第一粘土層が分布していない地域で見られる。

白井市で見られる湧水は、このタイプに含まれる。

図 4 手賀沼流域（南部）の地下水涵養・地下水流動と湧水の模式図

（出典：『手賀沼水循環回復行動計画』（千葉県、2022 年 12 月改定））



※硝酸性窒素は、水中では硝酸イオンとして存在している。湧水の曹参性窒素濃度が高い場合には、周辺の土壤等から硝酸イオンが混入していると考えられる。硝酸イオンの負荷源としては、家畜のふん尿や生活排水に含まれるアンモニウムが酸化されたものや、農地の肥料等が考えられる。地下水の環境基準（硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素）は10mg/L以下とされており、それを超えるのは望ましくない。

図5 手賀沼流域の湧水調査結果

（出典：『手賀沼水循環回復行動計画』（千葉県、2022年12月改定）より抜粋）

(3) 印旛沼流域の概要

印旛沼は、千葉県の北西部に位置し、北印旛沼と西印旛沼に分かれており、西印旛沼には鹿島川・高崎川・手繰川・神崎川・印旛放水路（新川）・桑納川・師戸川等の河川が、北印旛沼には江川・松虫川等が流入し、印旛沼の水は、長門川を通して利根川に流れている。

神崎川は、白井市根にその源を発し、北東に流れた後、南東に向きを変え、支川を合流しながら、印旛放水路（新川）に流入する河川で、涵養域である台地では市街地が広がるが、下流部では谷津や斜面林が残る。

印旛沼流域は、台地（下総台地）とこれを浸食している谷津と呼ばれている谷底低地、及び谷津に面した斜面や崖から構成されている。台地は保水性・透水性の優れた関東ロームと呼ばれる土層で覆われ、台地や斜面に降った雨は、地表水として流下し、または地下へ浸透して、湧水となって印旛沼に流入する。さらに、上位の帯水層から下位の帯水層（下総層群）へと浸透する流れも存在しており、この水もいずれは印旛沼へ流入する。印旛沼流域では、このような地形を背景に、谷津頭や斜面からの豊富な湧水が湧出して、流域の自然環境や人の暮らしの基本的な要素となっている。

印旛沼流域は、戦後の高度成長とともに人口が増加し、特に首都圏に近い西部において市街化・宅地化等が進んだ。この土地利用の変化により、雨水が地下に浸透しにくくなり、湧水が減っている。また、表面流出（雨水が地下浸透せず地表面を流れること）が増加し、道路冠水や住宅の浸水等の水害が発生している。

■印旛沼流域の概要

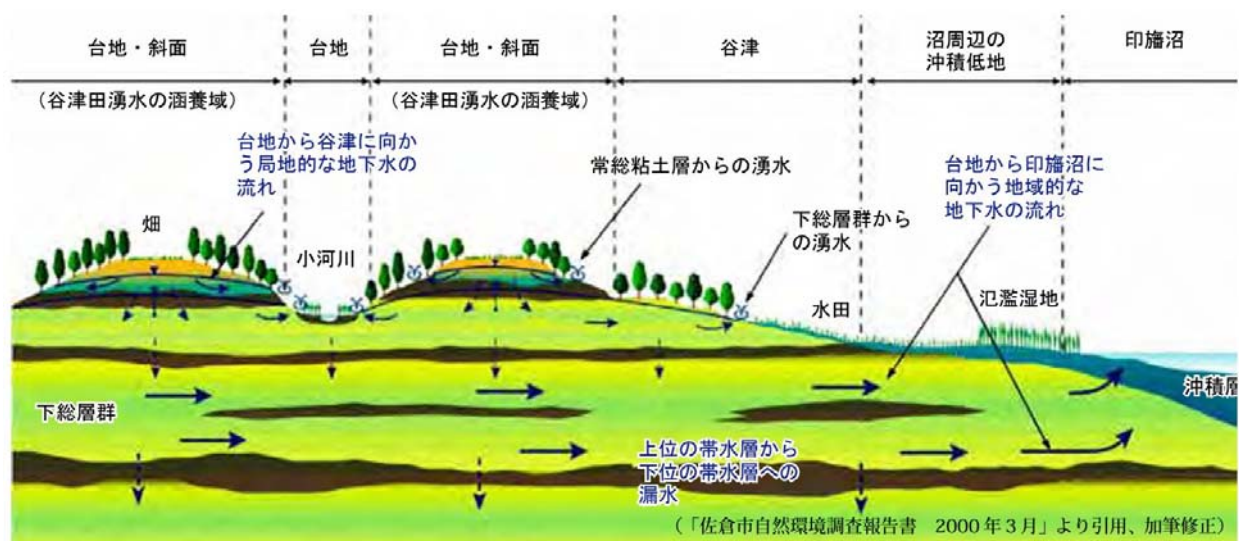


図6 印旛沼流域の地形構造とその変遷

(出典：『印旛沼・流域再生 恵みの沼をふたたび印旛沼流域水循環健全化計画』（千葉県、2010年3月）)

1.2 歴史・文化

(1) 古代～中世：下総台地上のムラとしての発展

白井市が位置する下総台地は、約 180 万年前に始まる第四紀更新世中に繰り返し訪れた氷期・間氷期に伴う海水面の変動や激しい地殻変動、富士・箱根を給源とする火山灰降下によって形成された。縄文時代～古墳時代の遺跡からは石器や土器等が出土しており、肥沃な土壤に恵まれた台地上に人々が集まり、ムラが形成されていたことがうかがえる。

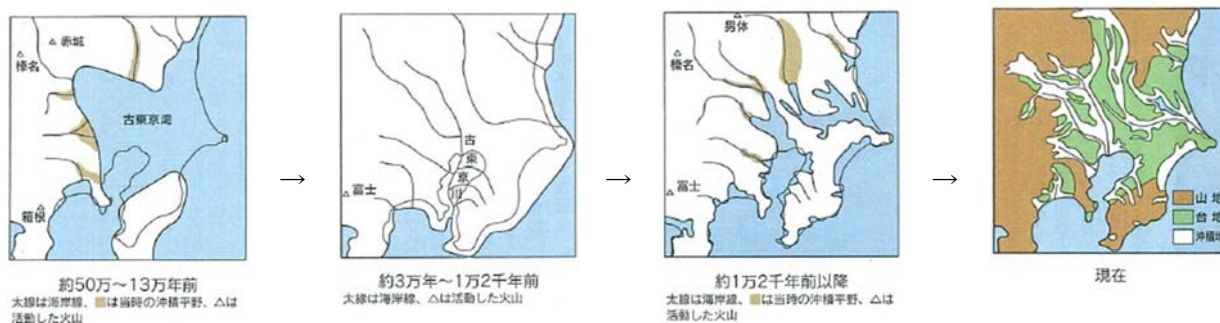


図7 下総台地の成り立ち



図8 弥生時代後期の土器
(捕込附遺跡 1・2 号住居跡出土)



図9 古墳時代の石製模造品
(復山谷遺跡 120 号住居跡出土)

(出典：『白井のあゆみ：白井市郷土資料館 10 周年記念誌』（白井市郷土資料館 編, 2005 年）

(2) 近世（江戸時代）：道・宿場町の発展、牧の整備

① 道の整備・宿場町としての発展

江戸時代になり、港町銚子から利根川を経て江戸へ向かう街道が発達した。鹿島道（現在の木下街道）はそのうちの1つである。白井市内には鹿島道の宿場として「白井宿」が整備され、旅籠や茶屋が並ぶ宿場町として発展した。

また、鹿島道とは別に、銚子の魚を新鮮なうちに江戸へ運ぶ道として、鮮魚（なま）道が発達した。鮮魚道沿いの富塚村には牧士の川上家（後述）があり、江戸への木炭輸送の経路でもあった。鹿島道と鮮魚道は、江戸への物資供給を担う重要な街道であった。

国指定重要文化財に指定されている滝田家住宅も、道が整備された江戸時代初期に建てられたといわれている。滝田家住宅のある平塚村にはかつて河岸（船着場）があり、利根川・手賀沼の舟運と松戸宿を結ぶ鮮魚街との交通の要地であった。平塚村の河岸の発達が滝田家住宅の成立に影響したことがうかがえる。



図10 橋本宿（白井宿）絵図

（出典：『木下街道展 - 江戸と利根川を結ぶ道』（白井町郷土資料館他編, 平成11年）

② 牧（印西牧・中野牧）

下総台地は戦国時代以前から軍馬を育成する牧場（牧）に利用され、周辺の村々が馬の世話をしてきた。そのこともあり、江戸幕府は下総台地に広大な馬の牧場を設置した。江戸時代も軍馬を育成したが、農民に売却され農耕や輸送に利用された。下総台地の西側が小金牧、東側が佐倉牧と呼ばれ、白井市は小金牧のうち「印西牧」と「中野牧」の範囲に入っている。各牧は周囲に野馬除土手や堀を巡らせ、野馬の村への進入を防いでいた。現在も野馬除土手の一部が残存している。

日常の牧場の管理責任者は牧士（もくし）とよばれ、白井市域では、富塚の川上家と中村家、中木戸の風間家、白井木戸の後藤家があった。川上家では、幕府の寛政の改革に伴い川上右仲（うちゅう）が牧士に任命されると、牧場内のクヌギを活用した木炭の製造に力が入れられた。植樹を行い、植えた木から木炭を作り、その木炭を鮮魚道を通して江戸等に出荷していた。



図 1 1 印西牧・中野牧位置

(出典：『白井のあゆみ：白井市郷土資料館 10 周年記念誌』（白井市郷土資料館 編, 2005 年）



図 1 2 印西牧場の真景図

販売用の野馬を捕獲する「野馬獲り」の様子を描いている。

(出典：『木下街道展 - 江戸と利根川を結ぶ道』（白井町郷土資料館他編, 平成 11 年）)

(3) 近代（明治・大正）：白井村の誕生

明治時代になると、政府の政策により村の分合が進んだ。明治初期から 5 回にも及ぶ分合を経て、1889（明治 22）年に白井村が誕生した。



①明治初期（1874 年頃）



②小村合併後（1875 年頃）



③連合村（前期）（1878～1884 年）



④連合村（後期）（1884～1889 年）



⑤白井村・永治村（1913～1954 年）

図 1 3 白井村誕生までの流れ

(出典：『白井のあゆみ：白井市郷土資料館 10 周年記念誌』（白井市郷土資料館 編, 2005 年）

(4) 近現代（昭和）：都市の形成、産業の発達

① 戦後の開拓事業

第二次世界大戦後、海外からの引揚者や戦争による離職者の就業と食糧問題解決のため、国策として緊急開拓事業が実施された。その一つとして富士地区の開拓が始まった。また、自作農民への農地解放が進み、このことが現在の白井の特産である梨の栽培の広がり大きく寄与した。

② 工業団地の誕生

1970（昭和 45）年に国道 16 号線の千葉 - 白井間が全面開通した。産業道路の性格にあった国道 16 号線の沿線には次々と工業団地が誕生し、市域では 1967（昭和 42）年～1974（昭和 49）年にかけて白井第一・第二工業団地が誕生した。

就業人口比は、1965 年は第一次産業従事者が 70%を占めていたが、1980 年には 20.2%となった。第三次産業従事者が 40.8%、第二次産業従事者が 30.9%となっていることから、20 年あまりで市域の産業構造が大きく変化した。

③ 千葉ニュータウン開発

戦後の高度経済成長で首都圏に人口が集中し、住宅や宅地が都心部で不足していた。そのため政府は 1963（昭和 38）年に強制的な土地収用を認めた新住宅市街地開発法を制定し、公団等による大規模住宅開発を可能にした。千葉県では、成田空港へのアクセスを確保しながら、沿線に宅地を一体として整備し、北総地域の中核都市を形成する「千葉県北部地区新住宅市街地開発事業」が 1969（昭和 44）年に施行決定され、ニュータウン開発が開始した。

1979（昭和 54）年に清水口・大山口地区で初の入居が開始されると、白井市は急激に人口が増加した。商店街や緑豊かな公園、遊歩道なども整備されていき、都市化が進んでいった。



図 1 4 千葉ニュータウン初期の西白井駅周辺の様子（昭和 55 年）

（出典：『白井のあゆみ：白井市郷土資料館 10 周年記念誌』（白井市郷土資料館 編, 2005 年）

(5) 白井市の民俗

白井市の民俗を伝えてきたのは、家や自治・生活・生産の単位となってきたムラと呼ばれる江戸時代の村に由来する各地区である。都市化が進んだ現在でも、かつてのムラの祭りや行事が残っている。以下は、白井市で現在でも行われている代表的な祭りや行事を示す。

① オビシャ

正月の行事であるオビシャ（歩射／奉射）は弓神事を伴った行事である。法目のオビシャは現在も弓神事が行われており、市指定文化財に指定されている。

② 神楽

七次地区では「大日神楽」と呼ばれる神楽が伝承され、現在でも行われている。元旦祭・オビシャ・秋祭りの年三回、神楽連中と呼ばれる舞い手により奉納されている。

富塚地区の神楽は現在行われていないが、「富塚の神楽用具」は市指定文化財に指定されている。

③ 辻切り

辻切りとは、ムラの出入口にあたる境界部に札を立てるなどして、ムラの外から中に疫病や厄災が侵入するのを防ぐために行われる共同祈願のひとつである。富ヶ沢地区で現在も行われている辻切りは、陰陽道や密教などに由来すると考えられる文字や五芒星、縦横各 9 本の格子文が書かれた特徴的な木札を下げたもので、市内を代表する辻切り行事である。



図 15 法目のオビシャ



図 16 富塚の神楽



図 17 富ヶ沢の辻切り
(画像出典：白井市 HP_文化財)

【参考文献】

- ・白井市郷土資料館編『白井のあゆみ：白井市郷土資料館 10 周年記念誌』, 2005 年
- ・白井町郷土資料館他編『木下街道展 - 江戸と利根川を結ぶ道』, 平成 11 年
- ・白井市教育委員会『白井市の民俗 1～民間信仰～』, 2003 年

1.3 植生・生態系

(1) 植生

環境省の現存植生図（2008 年）によると、植生区分として最も面積が大きいのは約 22%を占める市街地であり、畑雑草群落、果樹園、水田雑草群落といった農地は合計で約 40%となっている。次いで、緑の多い住宅地が約 9 %、植林地が約 8 %、工場地帯、クヌギ・コナラ群集がそれぞれ約 5 %となっている。

前述の地形分類図と比較すると、市街地の分布はローム台地（中位）の分布と対応しており、水田雑草群落の分布は谷底低地の分布と対応していることがわかる。

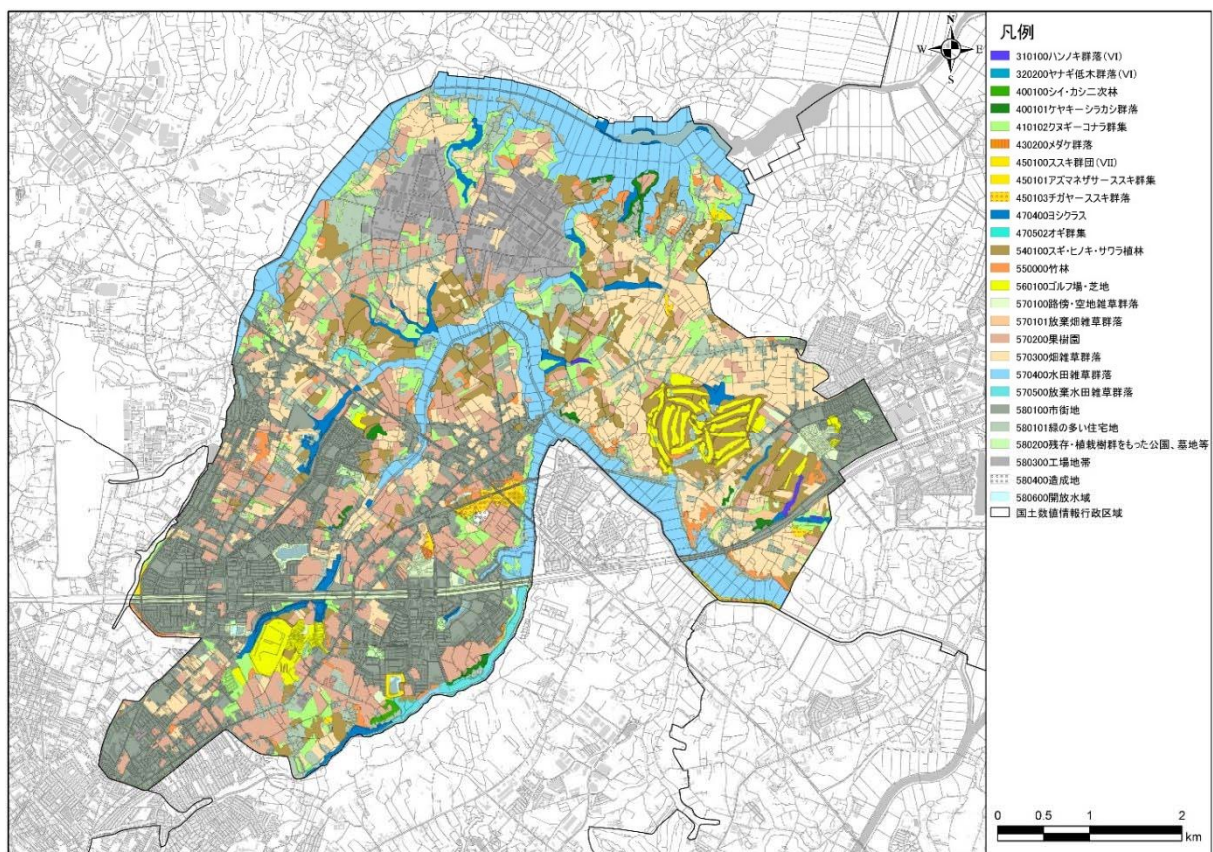


図 18 現存植生図

(2) 動物の生息環境

野生動植物の生息地としての白井市は北西から南東部にかけて走る片側 2 車線の国道 16 号線と、東西に走る北総鉄道とそれと並行する国道 464 号（北千葉道路）によって大きく分断されている。市内の自然環境は昭和 40 年以降に始まった千葉ニュータウンの建設によって狭められ、昭和 50 年以降山林の割合が大きく減少し、宅地や開発予定地が増加した。緑地の残存状況から見ると、野生生物にとって良好かつまとまった自然環境は、国道 16 号と北総鉄道によって分断された市域の北側半分に片寄っている。しかし、船橋市と境を接する二重川流域には船橋県民の森を含む比較的良好な自然環境が残されており、白井市にとっても貴重な環境であると言える。

千葉県の北総地域では、原生的な自然環境はほとんどが消滅しているが、水田、用水路、ため池、雑木林、入り会い共有地の草地や牧草地など、農林業や牧畜に伴う人為的管理によって維持されてきた人里の身近な自然は、日本固有の生物が生息する立地として、それを保全する価値を有している。また、絶滅の危機に瀕する動植物の生息・生育地でもある。

湧水の周辺には、安定した水量と水温に特徴づけられる湿地が発達し、独特な生物相が成立する。また、水田は、耕作に伴う攪乱により、植生が密になりすぎず一定量の解放水面が維持されるため、光や温度条件などが多様化しやすく、多様な湿地性動植物の生息・生育の場となる。湧水と水田を内包する谷津田は、水田生態系の中でも特に多様性の高い生物相が成立しやすい。千葉県内では、スナヤツメ、ホトケドジョウ、サワガニ、オニヤンマなどの水生生物が、谷津田の環境と強く結びついて生息していることが確認されている。また、希少性の高いニホンアカガエルは湧水によって常に水面が維持される谷津が重要な産卵場になっている。

谷田地区は、市内で最も古くに創建され大径木のスダジイが多く生育している宗像神社に隣接しており、サシバの繁殖が確認され、メダカとゲンジボタル、ヘイケボタルが生息する。また、二次草原には貴重な草原性の植物が生育し、かつての印西牧のなごりともいえる歴史的な自然環境が残されていた。これらの地区は現在、北総線と国道 464 号により分断されている。

北部地区にはニホンアカガエル、トウキョウダルマガエル、メダカ、ヘイケボタルが生息し、さらに複数種の猛禽類が越冬していた。台地上には社寺林などの林があり、集落としての歴史も古く、歴史的景観と自然的景観の組み合わせにより形成された景観が残されている。

また、折立地区ではオオタカが繁殖活動を行い、フクロウも確認されている。市内有数の大径木が多い広大な林がある。

白井市の生物多様性調査結果

専門調査員によって解明された、白井市の動物相をそれぞれのグループ別に、確認された種数を示します。
確認された動物種は 脊椎動物72種 昆虫類 2148種 クモ類146種。

そのほかの昆虫
双翅類 142種
カメムシ類 200種
カマキリ類 4種



確認種数

カエル類 6種
サンショウウオ類 1種
ヘビ類 6種
トカゲ類 3種
カメ類 3種



確認種 628種



確認種 チョウ類50種
ガ類393種



確認種数

在来種 7種
帰化種 3種



確認種 ハチ類 598種
アリ類 32種



確認種 69種



谷田地区 28種(サシバ宮楽)
木地区 27種
折立地区 30種(オオカ宮楽)
神々廻地区 27種(オオカ宮楽)



確認種 合計15種
在来種 9種
外来種 4種
国内移入種 2種?



確認種 32種
白井市新記録が12種



確認種 146種
千葉県初記録が2種
(タテシヤリグモ、カキワクグモ)

専門調査員によって解明された、白井市の植物相をそれぞれのグループ別に、確認された種数を示します。



植物相調査

谷田地区 合計357種(草原環境236種、森林・湿地環境 256種)
希少種: 18種
木地区 合計339種(低地環境228種、斜面の樹林環境157種)
希少種15種
折立地区 合計209種、希少種10種
神々廻地区 合計239種、希少種16種
平塚小森城址 合計198種、希少種9種
富ヶ谷地区 合計338種、希少種13種



コケ類確認種
セン類 75種
タイ類 30種
ツノコケ類 3種

環境省レッドリストにおいて純絶滅危機種に指定されている
コケ植物は、コウライイチョウコケなど3種が確認された。

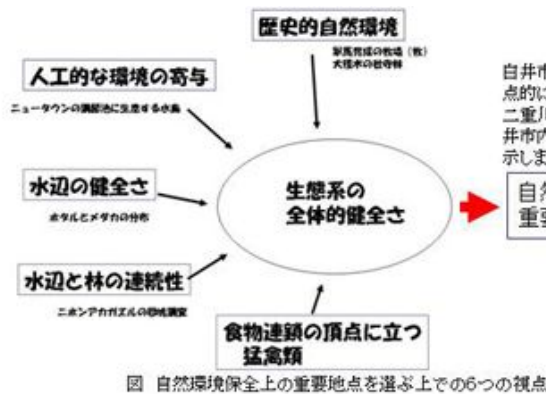


地衣類確認種
69種

概ね千葉県の代表的な地衣類相であることが確認
された。千葉県の保護上重要な野生生物として選定さ
れている地衣類は確認されていない

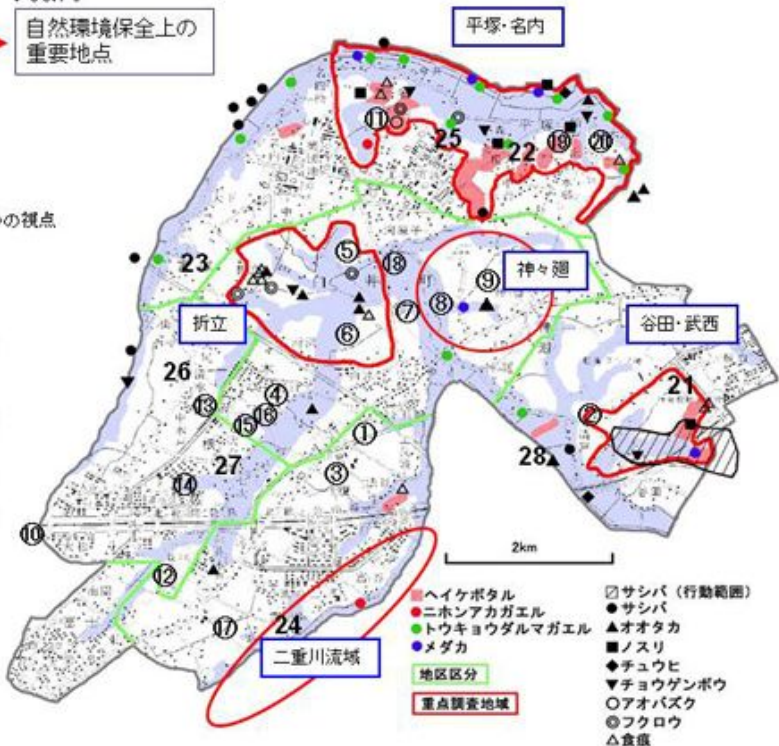
図 19 白井市の生物多様性

(出典：白井市生物多様性調査報告書 (<https://www.mnc.toho-u.ac.jp/v-lab/bioltop/shiroi/01summary/001.htm>))



白井の重要な自然環境とその保全

白井市の自然環境を生物多様性を守るという視点から評価して、その特徴を明らかにするため、重点的に調査する地域を6つの視点(下図)から検討しました。選ばれたのは、谷田、折立、神々廻、二重川流域の5箇所です。この5箇所を含めて、自然環境調査員養成講座の受講終了生らが、白井市内をくまなく調査し、未来に残したい自然環境として提案された地域と地点を次ページの表に示します。



未来に残したい、北総白井の自然環境

番号	地名・名称	見どころ	提案者
1	復・サギのコロニー	印旛沼流域で唯一のサギのコロニー	相馬
2	清戸・宗像神社	シイの大木、参道、ウメノキゴケ	坪井
3	復・文化センターの森	アカガシの森	長谷川
4	野口のモミ林	坂道とモミ	坪井・坂巻
5	河原子橋の南側森	広い樹林地	長谷川
6	神崎川下郷谷の湧水	湧水	岩本
7	神々廻・市民プール周辺の森	川岸から見た対岸の森	斎藤
8	神々廻・井天地下流域	森林景観	斎藤
9	神々廻の原	イナゴモドキの生息地・野草生育地	長谷川
10	大山口・金山産し源流の林	サワグルミの生育地	坂巻
11	千名内・谷津	集落	森田
12	根・鶴馬学校周辺の樹林と湿地	セウツノ木、ハシナ林	寺園
13	中木戸・市民の森	サクラ・樹林地	米田
14	七次・清水口調整池	ハクチョウ渡来地	坂巻
15	七次・保存樹林と谷津	湿地、樹林、草地	長谷川
16	野口・調整池下の谷津と林	谷津田	坂巻
17	平等寺北の森	キンラン・コナラ林	相馬
18	神崎川の土手(七次橋〜464号線)土手・ハシナ林		斎藤
19	延命寺境内		森田
20	滝田家	地衣類	岩本・森田
21	印西牧の野馬土手		坪井
22	平塚分校と平塚の森	校舎	坪井
23	富塚・鳥見神社		坪井
24	富ヶ沢・鳥見の森	鎮守の森	相馬
25	平塚・小森城址の森	大木の森林景観	森田・相馬
26	中木戸・調整池畔	コブシ、イチヨウ、アカガシ	米田
27	七次・長楽寺、大日神社	ボダイジュ、社叢林	坂巻
28	神崎川のハシナ・ヤナギ林	河畔林の景観	長谷川

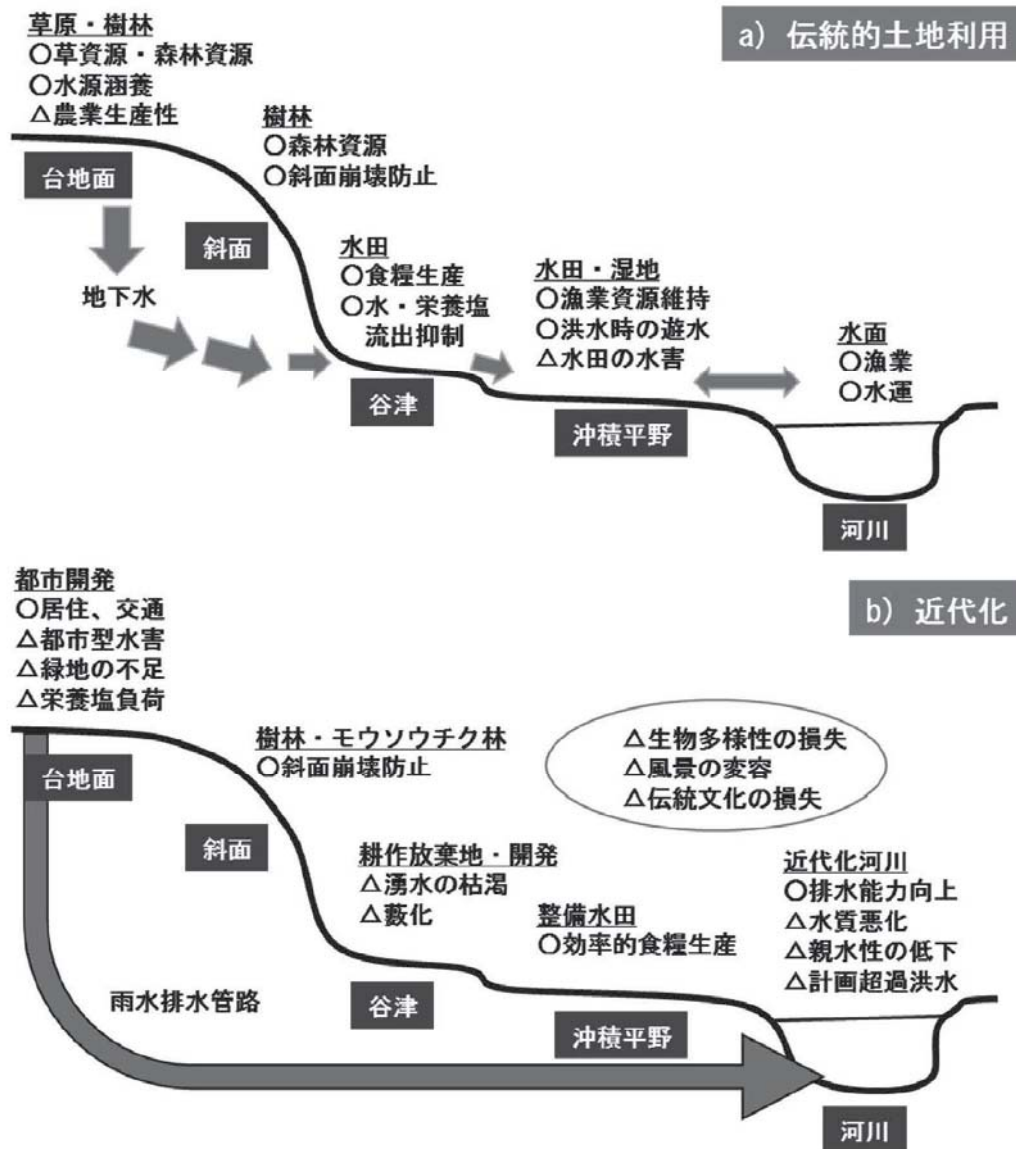


図20 白井市の重要な自然環境

(出典：白井市生物多様性調査報告書 (<https://www.mnc.toho-u.ac.jp/v-lab/bioltop/shiroi/01summary/001.htm>))

(3) 谷津・里山の生態系

谷津田とその周辺の樹林は、かつて里山として利用されてきた。里山は、一般的には農地や樹林地を中心として人と自然がかかわりながら維持されてきた景観を指す言葉であるが、樹林、草地、農地、湿地という水循環によって相互につながる場を、食料や燃料の供給だけでなく、地下水涵養、雨水流出抑制、水質浄化など、多様なサービスをもたらす場として活用していた伝統的な土地利用でもある。



凡例 ○：主要な生態系サービス、△：顕在化した主要な問題

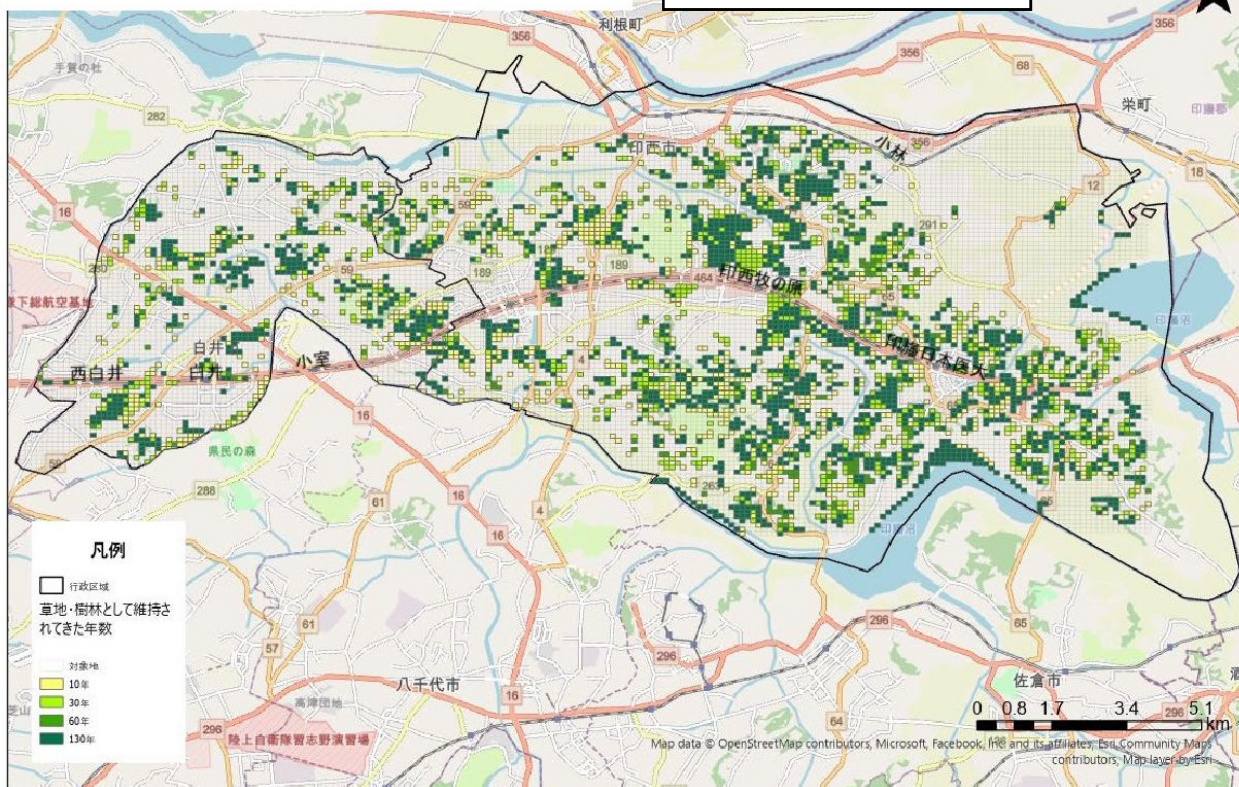
図 2-1 地形要素ごとの主な土地利用・土地被服と生態系サービスに関連する問題の特徴

(出典：『里山グリーンインフラ』による気候変動適応：印旛沼流域における谷津の耕作放棄田の多面的活用の可能性』(西廣淳ら、応用生態工学 22(2), 175-185, 2020))

白井市における特徴的な生態系の1つである草地は、地形や過去の土壌改良の有無等により樹林化しにくい立地があり、研究によりそのような場所は生物多様性が高いことがわかっている。そのような場所は雨水浸透能も高く、水源涵養の面からも重要な生態系と言える。

草原・樹林の持続年数

データ更新予定



雨水浸透能

データ更新予定

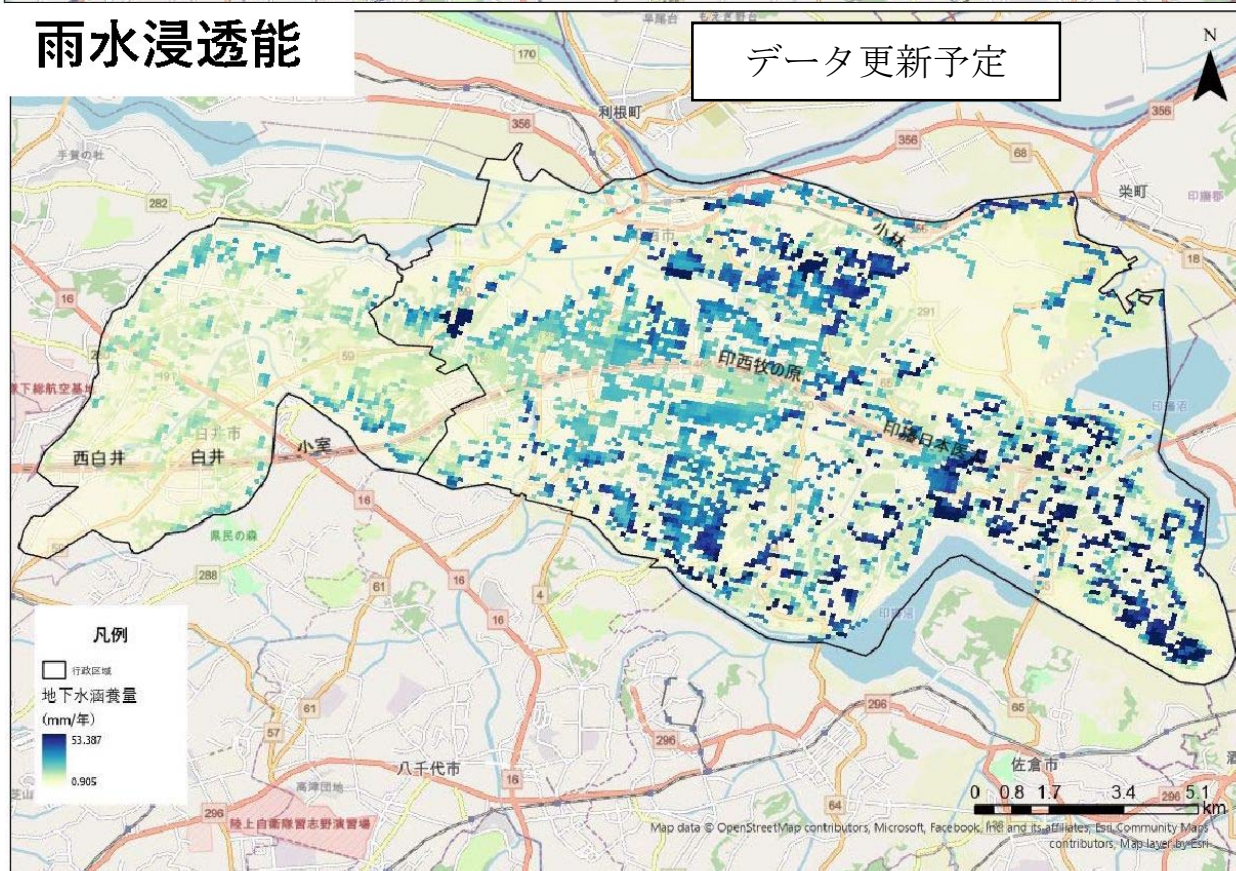


図 2 2 草地・樹林の持続年数と雨水浸透能の関係

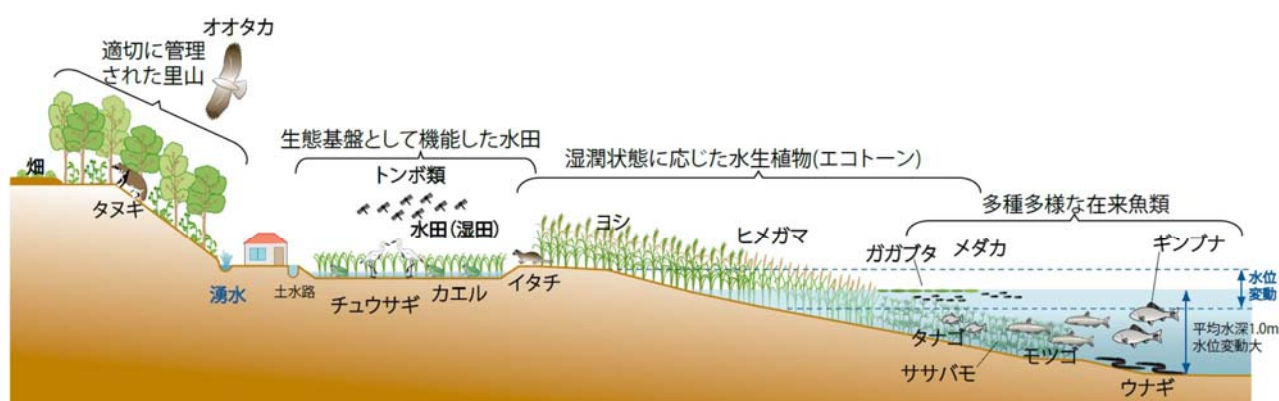
(出典：持続的な企業活動における「足元のグリーンインフラ」の活かし方講演会：

「千葉県北部におけるネイチャーポジティブオプション」(2024 年 9 月 7 日西廣淳セミナー資料))

かつて、湧水が多く湧出する箇所周辺の周辺には多様な生物が生息・生育していたが、現在では、湧水枯渇や谷津の埋め立て等により、良好な生息場が失われている。また、外来種が多く侵入し、在来の生物に影響を与えている。

一方、流域の河川等では、治水対策や農地の土地改良等のため、河川及び水路の直線化にあわせ、コンクリート化により、産卵場所となる水辺植生の喪失や、堰や段差による移動経路の遮断によって、魚類等の生物が減少している。また、水質悪化や貯水池化による水深増加等の影響により、水草も減少している。

《過去：昭和 30 年代》



《現 在》

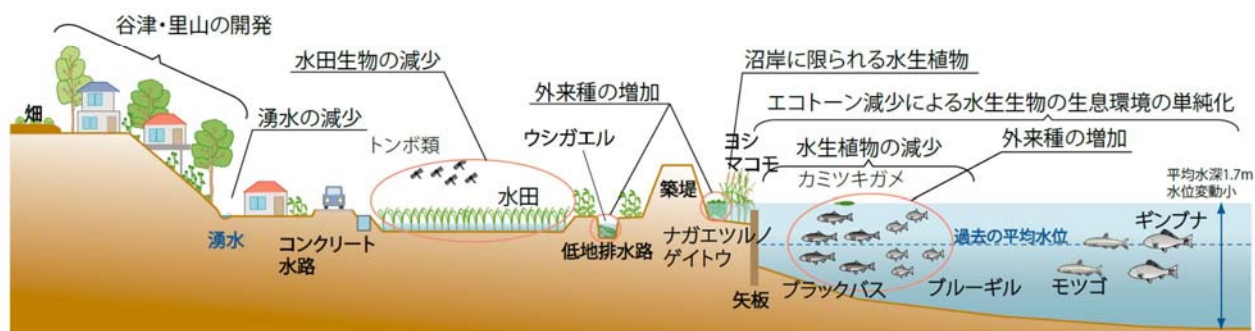


図 2 3 生態系の変化

(出典：『印旛沼・流域再生 恵みの沼をふたたび印旛沼流域水循環健全化計画』（千葉県、2010 年 3 月）

1.4 土地利用

(1) 住宅地

北総線の白井駅や西白井駅周辺や桜台地区、西白井地区には、新住宅市街地開発事業や土地区画区整理事業によって整備された、低層の戸建住宅や中・高層の集合住宅が集積し、良好な住宅地の景観が見られる。

また、木下街道の沿道の一部には、住居と庭木等が一体となった歴史的な建築物が残っている。その他、富士地区には戦後の開拓により形成された住宅地が見られる。



写真1 桜台の住宅地



写真2 堀込の団地



写真3 木下街道



写真4 富士の住宅地

(2) 商業地

本市の商業施設は、北総線駅周辺と街道や幹線道路沿道に立地している。

北総線の白井駅や西白井駅周辺には商業施設が集積している。しかし、商業施設の多くが老朽化しており、また一部では空き店舗も発生している。

国道 16 号や幹線道路沿道には、商業施設が点在しており、一部には目立つ形態や色彩の建築物が見られる。また、木下街道や風間街道をはじめとして、富塚、白井などの街道沿いには、個人店も点在している。



写真5 西白井駅周辺の商業施設



写真6 木下街道沿いの店舗

(3) 工業・産業地

白井工業団地には、工業施設のほか運輸・倉庫施設などの工業系施設が集積している。一部の施設では緑化等をしているが、目立つ形態や色彩の建築物や工作物もみられる。

また、国道 16 号と県道 189 号の交差部にも、工業施設のほか運輸・倉庫施設などの工業系施設が集積している。

そのほか、街道沿道の一部には、農地や樹林地に介在して、資材や廃棄物の集積場、作業場などが散在している。



写真 7 白井工業団地



写真 8 白井工業団地



写真 9 国道 16 号と県道 189 号の交差部周辺の
工業系施設

(4) 交通施設

国道 464 号と北総線は市の南部を東西に並走し、本市の骨格を形成している。特に、国道 464 号は鉄道用地と一体となり、その幅員と長さにおいて日本最大級の広域骨格軸を構成している。

また、北総線の白井駅と西白井駅は、千葉ニュータウン入居開始と同時期に開通しており、市の交通の要衝となっている。

そのほか国道 16 号沿道や一般県道千葉ニュータウン北環状線は南北に伸びており、その沿道は多くの市民の目に触れるところである。

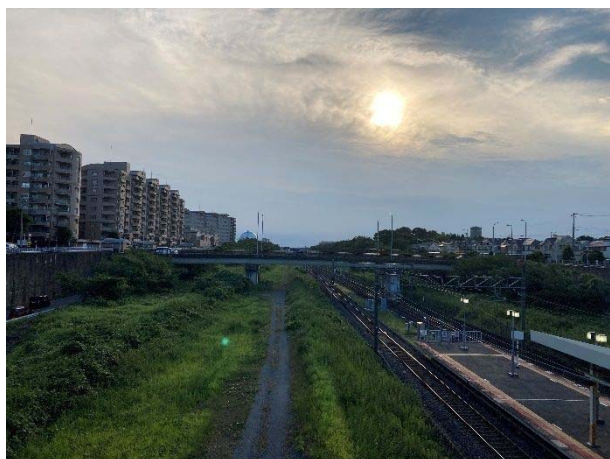


写真 1 0 国道 464 号と北総線



写真 1 1 西白井駅

(5) 農地

下手賀沼沿いや神崎川沿いの低地には田畑が多くある。また、田畑の周辺には、平塚地区や法目地区など、民家と屋敷林、庭木がみられる。

低地と台地の境目となる、平塚地区や谷田清戸地区には大小の河川の浸食作用によって枝状に形成された台地特有の谷津が広がっている。

台地の上には、梨畑が存在し、一部は住宅地に隣接した形で残っている。



写真 1 2 神崎川沿いの水田



写真 1 3 法目地区の道路沿い



写真 1 4 谷津田



写真 1 5 梨畑

(6) レクリエーション施設

市内の公園のうち、白井総合公園や運動公園は比較的規模が大きく、休日には多くの人々が利用している。加えて、土地開発事業等で整備された公園が多数あり、豊かな生活環境を形成している。また、市民の森や特別保全緑地があり、樹木に囲まれた空間を保全している。

その他、市内には一体的な土地開発事業によって整備された、駅や公園を起点とした緑道が複数存在する。

そのほか、船橋カントリークラブや JRA 競馬学校など、民地でありながら豊かなみどりの空間を有している場所がある。



写真 1 6 白井総合公園



写真 1 7 神々廻市民の森



写真 1 8 桜台の緑道